



ポストモダン時代の東南アジア文学

宇戸清治

世界を覆うグローバリズムの中、経済発展めざましい東南アジアでは、文学もまたそれと軌を一にしてダイナミックな脱皮と再生を遂げつつある。文学はそれを生んだ社会を内側から照射する鏡であり、社会規範を内面化するための装置として人生と世界とを意味付けする。かつてこの地域の文学のテーマは、植民地主義や強権政治の犠牲者である民衆の側から歴史や社会や個人の現実を描くことであった。アジアでノーベル文学賞に最も近いといわれるインドネシア作家プラムディア・アナンタ・トゥールの『人間の大地』（一九八〇年）、タイの国民作家と呼ばれ亡命先の中国で客死したシーブーラーパーの『未来を見つめて』（一九五七年）、ドイモイ文学の最高傑作といわれるベトナム作家バオ・ニンの『戦争の悲しみ』（一九九一年）などはいずれもその代表作といえよう。

園のジョギングを観察し続けるだけの孤高の非行為者であり、そこには主人公の名前や地名を除けば、タイ的なものの表象は全くない。また長篇『パンダ』（二〇〇四年）では、疎外感の原因が間違った惑星に生まれたことであることを悟った主人公が、同じように地上での生存に苦しむ同胞達と共に母星へ帰還しようと苦闘する姿を、愚かな人類へのアイロニーを込めて綴っている。その他、現実と幻想の間を自由に行き来して人生の真実を模索する『電報』（一九七二年）のプトゥ・ウィジャヤ、舞台や主人公ですら固有名詞を喪失した中で抽象的物語世界が展開される『渴』（一九七二年）のイワン・シマトゥパンなども、ポストモダン時代を疾走するインドネシア作家である。

女性作家も黙ってはいない。純愛や崩壊家族といったテーマはすでに昔話であって、彼女たちの意識は、性を国家や男が管理することへの異議申し立て、挑戦状としての大胆な性描写と内側からの女性の解放に向けられている。タイのカム・パカーは、短篇『ぼくと妻』（二〇〇八年）その他によってお仕着せの性意識にラジカルな議論を持ち込んだ。ちなみに、彼女の京都大学大学院時代のテーマは日・タイのポルノ小説比較研究である。ベトナムでは、タブーであった戦争のトラウマと性の結合による救済を大胆に表現したドー・ホアン・ジュウの短篇集（「金縛り」など、

しかし、一九八〇年代に始まる開放経済とポストモダン社会の到来は、この地域の文学状況にかつてない変化をもたらしつつある。あらゆる人間的価値が記号化され、分節化された人間がモノによってしか自己を確認できなくなったとき、人間存在の条件や大きな物語といった伝統的テーマやリアリズム的な叙述形式が終焉を迎えたのは当然の成り行きである。そうしたらうねりの中、現在の東南アジア文学界には、国家、民族、公用語といった枠組みを超えるトランスカルチュラルな視点から創作を行う若手作家が相次いで登場している。

たとえば、タイのポストモダン小説の旗手と言われるプラープダー・ユンの短篇集『鏡の中を数える』（二〇〇〇年）¹⁾に登場する主人公たちは、オタク行為によってしか家族の紐帯を確認できないファミリーや、ひたすら二〇〇八年）が、いまだに文学を管理しようとする時代錯誤の政府によって出版差し止めにあっている。

東南アジア文学がわが国に紹介され始めて、およそ三〇年が経つ。小説、詩集、評論などを合わせた総数は三〇〇点を超えるだろう。諸外国でこれだけの数の東南アジア文学が翻訳されている国はない。そして、この地域の文学研究の最先端を担っているのが東京外国語大学である。「東南アジアにも文学があったの？」はもう古い。留学生や現地の人から「村上春樹の作品では何が一番好きですか？」と訊かれたら、余裕で答えたついでに「プラープダーの『パンダ』は結局ブラネットに行き着いたと思う？」と切り返せたら、あなたの株もぐっと上がるというものだ。

* 本稿で採りあげた作品は、すべて邦訳で読むことができます。プラープダー・ユンの長篇小説『パンダ』は東京外国語大学出版会より近刊予定。

うど・せいじ 一九四九年生まれ。東京外国語大学大学院教授。タイ文学・タイ映画論。著書に『たのしいタイ語一冊で学ぶ会話、文法、文字』（大学書林）、『はじめての外国語（アジア編）タイの言葉』（監修、文研出版）など。訳書にプラープダー・ユン『鏡の中を数える』（Typhoon Books Japan）、チャッタワーブック『二つの時計の謎』（アジア本格リーグ2、講談社）など。



バルセローナの光と陰

立石博高

いま、「バルセローナ・モデル」という言葉が、建築学・都市工学の分野で脚光を浴びている。一九世紀以来のスペインの近代化・産業化の過程で牽引役を務めたバルセローナ（スペイン北部カタルーニャ地方の首都）だが、一九七〇年代にオイルショックに見舞われて以後、繊維工業を中心とした産業は衰退して市内の荒廃が進んでいた。それが、一九九二年のバルセローナ・オリンピック開催、二〇〇四年の世界文化フォーラム開催、さらに現在進行中の都市改造プロジェクト22@Barcelonaなどによって、市街地が見違えるほど綺麗で魅力的な都市になってきたというのである。たしかに、『地球の歩き方バルセローナ』でも、おもな見どころとして「歴史的旧市街」や「ガウディ建築群」に加えて、「オリンピック村」や「現代建築群」が詳しく紹介されている。

なかでも注目されているのは、「多孔質化（エスポンハミェント）」と呼ばれる都市再生の事業で、古い市街地のあちこちに小広場や文化施設を設けて、それらの公共空間を介して、人の流れを地区内に呼び込むという戦略である。あたかもスポンジ（エスポンハ）の穴のように公共空間をちりばめて「多孔質」になった市街地は、古くからの危険で薄暗い界限ではなくなり、「都市生活の舞台」として脚光を浴びるようになっていく。こうしたバルセローナの動きは、都市再生の好事例として朝日新聞にも大きく取り上げられている（二〇〇九年六月三日付け）。

しかし、この都市再生の戦略には陰の側面があることを忘れてはならない。再開発地区内には、かつてスペイン産業革命の主役を演じ、「カタルーニャのマンチェスター」と自ら豪語したバルセローナの歴史を物語る製糸工場など

の建物が残っていたのである。それらの工場建物群の多くが取り壊されて、一部は公園になり、あとの大半は文化センターやオフィスに変わっている。また、これらの古い地区には低所得者層向けのマンションやアパートが軒を連ねていたが、いまや瀟洒なマンションが整然と並んでいる。もちろん、もともとの住民の一部は引き続きこの地区に住んで快適な生活を送るようになったが、賃貸住宅に住んでいた貧しい人々はもはや高家賃のマンションに入ることが

できない。昨年、私はこれらの再開発地区を歩いたが、明らかにジェントリフィケーション（高級住宅化）の現象が進んでいた。

バルセローナ市街地は綺麗になったが、安全な場所になったかという点、必ずしもそうではない。商店で

の万引、ツーリストを狙ったスリ、ひったくりの類が急増しているという。バルセローナ市当局は、今年に入って市内の目抜き通りに監視カメラを設置することを決定した。スリ、ひったくり、麻薬売買、売春などの取り締まりを強化し、歩行者が、より安心して散策を楽しめるようにである。だが、一見快適な公共空間を生み出したバルセローナ市街地がいま一番必要としているのは、住民相互の社会的つながり（ソシアビリティ）ではないかと思う。かつての街区は汚かったが、そこには仕事と生活のさまざまな絆があって、人々は安全に暮らしていたからである。

このように、私は、ものごとはさまざまな視点から見ていかなければならない、そしてなによりも、光がつくり出す陰の部分に眼差しを向けることが大切である、と思っている。



密集していた旧市街に創り出された公共空間（ラバル地区）

たていし・ひろたか 一九五一年生まれ。東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。スペイン近代史。著書に『世界の食文化14 スペイン』（農文協）、『スペイン歴史散歩』（行路社）、『スペイン・ポルトガル史』（編著、山川出版社）など。訳書にR・ケーガン『夢と異端審問』（松籟社）、H・ケイメン『スペインの黄金時代』（岩波書店）など。



古都としての奈良

村尾誠一

私の専門は日本古典文学である。研究のフィールドとなると、形態は様々だが本だということになる。しかし、自身の研究の一部分として実際のフィールドも持っている。それは奈良なのだが、古典時代には南都と呼ばれることが多い。その土地を描いた作品やそこで作られた作品が直接の対象となるのだから、結局は本になってしまいが、それらの作品達を結ぶのは、奈良という土地それ自体であり、その土地への私自身の酷愛である。

今年(二〇一〇年)は、奈良遷都千三百年ということでも、観光キャンペーンも張られている。和銅三年(七一〇)に奈良に恒久的な平城京が作られたが、延暦十三年(七九四)には京都に平安京ができ千年以上の都となることは誰も知るであろう。つまり、奈良は古典時代を通じて古都であったのである。私が興味を持ちフィールドとしているのは、

存する不退寺や能などに登場する在原寺など、業平所縁の地も多い。『うつほ物語』では「春日詣で」の巻が立てられ、この地がプロットの上でも重要な役割を果たしている。

この土地が一変するのが治承四年(一一八〇)の出来事である。平重衡の軍勢により、東大寺・興福寺の両寺を中心とする南都の中心がほぼ焼き尽くされてしまう。いま目にできる奈良時代の建造物が限られるのはこの事件故である。しかし、当時の人々の努力でただちに再建作業が行われた。この南都復興事業は大規模なもので、現存の東大寺南大門をはじめ多くの建造物が残されている。大仏も膝より上の体躯の部分はこの時のものである。

この再建事業は奈良時代の建造物や仏像などの復古再現なのだが、そのまま模造品を作るのではなく、もとの作品を手本としながらも、当時の新しい様式で古い作品を再現するという手法によるものであった。それは、私が専門の中心としている中世和歌のあり方とも相似である。中世和歌は、その時代の人々が理想とした王朝時代にすでに詠まれた傑作を手本として、新たな時代の方法で、王朝的な世界を再現しようとするものであった。それは相似の関係にあり、中世和歌の本格的な始発を告げる『新古今和歌集』の編纂が南都復興の時代と重なるのは偶然ではない。

紙幅が尽きるので近代に飛ばす。最初に酷愛という面映

古都として特別な位相を持った南都が、文学や文化に表象される様子なのである。無論、近代から現代にわたる展開も気になるといふより、自分にとってはより切実な関心でもある。

平安遷都以後の南都がただちに廃墟となってしまったというのではない。和語の世界、特に和歌で使われる歌語の世界では、その土地は「ふるさと」と呼ばれ、土地は荒れ果てて、時として廃墟の中にひっそりと忘れられた美女が暮らしているというようなイメージで捉えられている。が、現実には大寺院を中心にならぶの都市としての実質を備えていたと考えてよい。都からの往還も盛んで、佐保殿とよばれる権力者藤原氏の宿舎が賑わっていた時代もあったようだ。『源氏物語』ではこの地の影は薄いが、『伊勢物語』ではその冒頭の章段をはじめ、この土地の影は色濃い。現

ゆい言葉を使ったが、これは括弧に入れるべきであった。なぜなら、敬愛する歌人会津八一(『自註鹿鳴集』岩波文庫ほかは必読)の言葉だからである。彼の歌集『南京新唱』自序の「われ奈良の風光と美術とを酷愛して」というのによる。私が大学生のころは、この歌人をはじめ多くの奈良学者が愛用した日吉館という宿が東大寺の近くに残っていた。アルバイトの蓄えでも十日ほどの滞在は可能であった。この歌人の書に見下ろされながら、そこに集まった奈良に心酔する学生仲間との語らいの場でもあった何度もの奈良滞在が、私の研究の揺籃となったのである。

むらお・せいいち 一九五五年生まれ。東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授。日本古典文学。著書に『中世和歌史論—新古今和歌集以後』(青簡舎)、『残照の中の巨樹 正徹』(新典社)、『新統古今和歌集』(校注、明治書院)、『見果てぬ夢 平安京を生きた巨人たち』(共著、ウエッジ)など。





人生とともにある

フィールドワークと人類学

——「やもめ」から「シングル」研究をめぐって

椎野若菜

私の専門である社会人類学という学問は、異文化社会における長期間のフィールドワークを要する。私がフィールドとして選んだのは、ケニア西部のルオとよばれる人びとの村だった。大学院に入り、ルオ民族のことを研究することになった私は、ルオ人の居住地域を一人バックパックで回りだした。出会いがまた出会いをうみ、結婚してある町に暮らす同い年のアニヤンゴという女性と仲良くなり、彼女の実家を訪ねることになった。

アニヤンゴの実家には、彼女の実母と、僚母（一夫多妻社会なので父のほかの妻）、そして兄弟姉妹たちが沢山いた。私はすっかり、気さくない雰囲気にもまれて、そのお宅で暮らすことに決めてしまった。アニヤンゴの母たち

ぐって女性たちは、また男たちは、複雑な家族親族の人間関係を背景にどんなかけひきをしながら暮らしているのか。文献からは、寡婦をめぐる生き方の情報など、ほとんどと言っていいほど手に入らない。だが私はママと暮らし、村の女性たちとやりとりするなかで、とかく暗いイメージで捉えられがちな寡婦である彼女たちは、この「テール」制度の傘の下に意外にもオープンに夫の存在に代わる男性を選び、ときに代え、自分が必要とするパートナーを得ようと積極的に自分を生きていることを知った。

そしてまた、ほかの社会の寡婦のことが知りたくなって、フィールドワーカーの人類学者らに声をかけ『やもめぐらし』（明石書店）という本を編んでみた。寡婦という地位が必ずしも共通でなく、離婚女性と同じカテゴリーで捉えられる社会もあり、また異なる方法で限られた条件下でも果敢に生きる寡婦、あるいは非常に困難な状況におかれた寡婦など、さまざまな姿が描かれることで、寡婦というテーマは人生経験の浅い自分にはまだ早いことも改めて考えさせられた。

翻って、日本社会はどうだろう。ちょうど自分と同じ世代の女性たちが「アラサー」「アラフォー」であるとか、「おひとりさま」といった言葉でフォーカスされ、個人の生き方の選択も少しずつ多様化してきている。こんなに動

は、いわゆる夫を亡くしたやもめ、寡婦であった。私は母たちを「ママ」と呼び、娘としてすっかりお世話になった。ママとマーケットに行ったり、ともに料理し、食べ、片付けをし、ママの親族や友達のところ遊びに行き、ほとんど全てをともにした。

ルオ社会の寡婦たちのことを、自然に、ともに暮らすママたちの生活を起点としてみていくことになった。夫を亡くした女性たちが、この社会のなかで生きていくには、どのような術があるのだろうか。ルオ社会では、人類学ではよく知られる「レヴィレート」という、亡夫が兄弟と呼ぶ間柄の男性が残された妻を引き継ぐ、制度といていいような慣習がある。ルオ語で「テール」というその慣習をめぐ

きのある面白い機会はない、夫の死によってひとり、になる状態だけでなく、社会において「ひとり」であるとは、「シングル」で生きるとはどういうことか、社会の仕組みや信仰、歴史などのファクターとどう関係しているのか、もっと考えたいと思うようになった。またこれからの日本では、どのような生き方を社会として受け入れていくべきかを、他の社会から大いに学ぶことになるのでは、とも考えるのである。私自身が生きる日本とケニア・ルオというふたつの社会における「シングル」「ひとり」のありかたを、私自身の生きかたの選択の模索。人類学の場合、研究者の人生において、ある時期にかかわる関心とフィールドでの関心が重なるとき、より切実さとリアリティをもってテンションの高い研究ができるのでは？ と思うのである。まさに生きた学問である。

*アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「シングル」と社会——人類学的研究 <http://singleken.aacore.jp/>

しいの・わかな 一九七二年生まれ。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授。社会人類学・東アフリカ民族誌学。著書に『やもめぐらし——寡婦の文化人類学』（編著、明石書店）、『結婚と死をめぐる女の民族誌——ケニア・ルオ社会の寡婦が男を選ぶとき』（世界思想社）など。



多言語・多文化の扉をひらく

尹慧瑛

東京外国語大学と言えば、ある一つの言語・地域についてじっくり学ぶところというイメージが強いかもしれませぬ。たしかに外大生は「○○専攻語」の学生として入学し、卒業していくわけですが、その過程では多くの扉がさまざまな言語・文化・社会にひらかれています。私もまた、かつて外大で自分の母国語と呼びうるはずの朝鮮語をまるで外国語のように学ぶという、ちょっと不思議で厄介な経験をしつつ、この大学のなかにある多言語・多文化の空間をあちこち出入りするようになった一人です。

当時の東京外大は、一・二年次の専攻語の授業は決まった教室で受けることになっていたので、まるで高校生のよううにその部屋を拠点とした学生生活を送っていました。たまたに他の学科に友達を訪ねていったときなど、あたかも違う国に来たかのような感覚をおぼえた、というところまで

すが、「小さな外国」が校舎のなかに点在しているような気がしたものです。そんななか、専攻語の垣根を越えて、いくつかの地域における移民やマイノリティをめぐる問題についての授業を聴講したりしました。その後いろいろな経緯があつて、北アイルランドという地域に興味を持つようになり、卒業論文から現在まで北アイルランドを研究テーマのひとつとするに至りました。

さて、そんな私は教員としてしばらくぶりに母校に戻り、現在は多言語・多文化教育研究センターというところで、さまざまなプロジェクトの運営に携わっています。そのうち、特に新入生の皆さんにご紹介したのが、Add-on Program「多言語・多文化社会」という授業プログラムと、学生のボランティア活動を支援する「多文化コミュニケーション教育支援室」です。

Add-on Programを通じて伝えたいことはふたつです。

ひとつは、世界にはさまざまな言語・文化がある、というだけでなく、それぞれにおいても（あたりまえのことですが）さらなる多様性が存在する、ということです。またもうひとつは、そうした多言語・多文化状況が、わたしたちが暮らすこの日本社会においてもどんどん進行している、ということ。この日本社会の現実とより積極的に関わりたいと思ったなら、外大生にはまたとない機会が提供されています。

文部科学省の二〇〇八年の調査によれば、日本の公立学校には、約二万八〇〇〇人以上の日本語指導が必要な児童生徒が在籍しており、その数はこの十年で急激に増加しています。日本語が十分にわからず、友達との関係もうまく持てないまま、決して楽しいとはいえない学校生活を送っている子どもたちが、自分の国の言葉を少しでも話せる「お兄さん・お姉さん」に出会えたとしたらどうでしょうか。「多文化コミュニケーション教育支援室」では、そうした子どもたちの学習サポートのために、多くの外大生を地域の小中学校や日本語教室に送り出しています。また、さまざまな違いを超えてコミュニケーションの大切さを考える「国際理解教育」の授業づくりと実践もおこなっています。専攻語を通じて、一瞬にして多言語・多文化状況をつくりだせる外

大生ならではの魅力が、ここでも大いに発揮されています。というわけで、外大には思ったよりもはるかに多くの出会いが待っているかもしれません。この大学を拠点に、皆さんも多言語・多文化の扉をひらいてみてください。

*東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター
<http://www.tufs.ac.jp/blog/1s/g/center/>

ゆん・へよん 一九七三年生まれ。東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター准教授。エスニシティ論・北アイルランド研究。著書に『暴力と和解のあいだー北アイルランド紛争を生きる人びと』（法政大学出版社）など。

